

玉造町文化財調査報告

# 手賀古墳群

第3号墳・第4号墳発掘調査報告書

1994.7

玉造町教育委員会

# 序

玉造町は、県下でも有数の農業を基幹産業とする地域です。霞ヶ浦沿岸や楯無川をはじめとする中小河川流域の稲作では優良米を産出し、行方台地や石岡台地ではサツマイモ、エシャレット、ミツバ、ゴボウ等青果市場でも高く評価される野菜栽培が盛んです。

この台地には、早くから人間の暮らしがあったことを遺跡が物語り、近世そして近代から昭和30年代にかけては大規模な開墾の軌跡があります。

このような台地に刻まれた生活史の中で、多くの遺跡が消失してしまいました。特に、戦後の開墾により多くの古墳が破壊されました。農地の拡張や苗代づくりのために墳丘が削平されたり、各種施設建設に伴う造成により石棺が出土したという古老の声を聴くこともあります。

このたび、玉造町大字手賀地区の台地において、先の開発の名残としての箱式石棺が発見されたため、歴史的にも重要な文化遺産であることから、学術的な調査を実施いたしました。

本書は、手賀古墳群の第3号墳および第4号墳の発掘による調査成果を収めた記録です。本書が学術研究の資料として、また地域の人々が郷土の歴史文化に理解を深め、教育文化向上のため活用されることを希望いたします。

尚、調査に当たり、現地担当者である日本考古学協会員の岩松和光先生をはじめ調査に協力いただきました地元の方々のご労苦に対し感謝申し上げます。また、関係各機関および関係各位からご指導ご協力を賜りましたことに対し、深く感謝の意を表します。

平成5年3月

玉造町教育委員会教育長 渡 邊 正 則

抄 録

フリガナ	テ ガ コフンゲンダイ 3 ゴウフン ダイ 4 ゴウフンハクツチヨウサホウコクシヨ
書名	手賀古墳群第3号墳・第4号墳発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	岩松和光・高埜栄治・梶ヶ山真理
編集機関	玉造町史編さん委員会 / 〒311-35 茨城県行方郡玉造町甲 404
発行機関	玉造町教育委員会 / 〒311-35 茨城県行方郡玉造町甲 404
発行年月日	西暦 1994年7月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
テ ガ コフンゲン 手賀古墳群	イバラキケンナメカタ 茨城県行方 グンタマツクリマチテ 郡玉造町手 ガ アザアブミウチ 賀字鑑内	08255	1547	36° 4' 40"	140° 26' 5"	19890326  19890428	100 m <sup>2</sup>	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
手賀古墳群	古墳群	古墳時代	円墳? 2基	金銅製耳環 2個 人骨 5体	

## 例 言

- 1 本書は、茨城県行方郡玉造町大字手賀字鑑内外に所在した手賀古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、農地耕作中に発見された古墳を、遺跡の置かれる状況と今後の保存環境を考慮し、文化財保護保存の目的から町史編纂事業の一環として、玉造町教育委員会が主体となり、平成元年3月26日から4月28日までの期間実施したものである。
- 3 調査は、玉造町遺跡調査会・玉造町文化財顕彰会の協力を得て、日本考古学協会会員の岩松和光を主任調査員（担当者）、小谷和弘（教育委員会）を調査員として実施した。また、調査終了後整理作業を行った。
- 4 図面整理、トレースは岩松が、遺物実測、版組み等は、原喜代子、高埜栄治（教育委員会）が行った。
- 5 本文は、高埜が執筆し編集した。
- 6 手賀古墳群第4号墳出土の人骨については、国立科学博物館人類研究部馬場悠男氏の指導のもと梶ヶ山真里氏に依頼し鑑定していただいた。記して感謝の意を表したい。
- 7 調査及び報告書作成に当たっては、茨城県教育庁文化課ほか各方面の方々にご指導ご協力を賜った。末尾ながら感謝の意を表する次第である。

### 8 調査協力者および関係者

調査主任	岩 松 和 光	(日郎考古学協会会員)		
調 査 員	小 谷 和 弘	調査補助員	原 喜 代 子	高 埜 栄 治
作 業 員	横 須 賀 司 八	磯 山 尊 資	出 沼 四 郎	大 河 松 雄
	橋 本 勝 義	塙 育 造	野 原 ル ミ	
協 力 者	並 木 亨	成 島 謙 二	茂 木 彦 宗	野 原 幸 之 助
	田 山 信 男	鈴 木 亮 然	風 間 亨 夫	森 作 武 夫
	手 賀 勲	小 沼 典 章	(以上文化財保護審議会委員)	
	磯 山 賢	川 井 栄 二	(以上土地所有・管理者)	
	野 原 一 男	飯 田 廣	高 塚 栄	(以上地元区長)
	野 原 公 平	野 原 清		
事 務 局	玉造町教育委員会			
	渡 邊 正 則 (教育長)		石 橋 静 男 (教育次長)	
	中 田 邦 雄 (社会教育係長)		高 塚 義 夫 (社会教育指導員)	
	高 埜 栄 治 (社会教育主事)		小 谷 和 弘 (社会教育主事)	



# 目 次

序

例 言

目 次

挿 図 目 次

表 目 次

図 版 目 次

I 調査の契機と経過 .....	1
1 調査に至る経過 .....	1
2 調査経過 .....	2
II 遺跡環境 .....	4
1 遺跡の立地 .....	4
2 遺跡と周辺の歴史 .....	6
III 調査成果 .....	7
1 手賀古墳群の概要 .....	7
2 第3号墳 .....	11
(1) 遺構 .....	11
(2) 遺物 .....	12
3 第4号墳 .....	13
(1) 遺構 .....	13
(2) 遺物 .....	14
4 その他の遺構と遺物 .....	18
5 第4号墳出土人骨 .....	19
IV まとめ .....	31

## 挿 図 目 次

第 1 図 玉造地方の古墳 …………… 5	第 6 図 第 4 号墳主体部平面・断面実測図 15
第 2 図 手賀古墳群位置図 …………… 8	第 7 図 第 4 号墳主体部掘り方平面実測図 17
第 3 図 手賀古墳群調査区設定図 … 9・10	第 8 図 周溝調査トレンチ断面実測図 … 18
第 4 図 第 3 号墳主体部平面・断面実測図 12	第 9 図 第 4 号墳人骨出土状況図 ……… 26
第 5 図 第 4 号墳出土遺物実測図 ……… 14	

## 表 目 次

第 1 表 第 4 号墳出土頭骨計測値 ……… 20	第 3 表 第 4 号墳出土人骨一覧 …………… 27
第 2 表 第 4 号墳出土四肢骨計測値 … 23	

## 図 版 目 次

P L 1 調査風景 …………… 2	P L 6 第 4 号墳出土頭蓋骨遠景 ……… 35
P L 2 第 4 号墳人骨 1 …………… 29	第 4 号墳出土頭蓋骨近景 ……… 35
P L 3 第 4 号墳人骨 2 …………… 30	第 4 号墳金銅製耳環出土状況 … 35
P L 4 遺跡遠景（航空写真） ……… 33	第 4 号墳出土金銅製耳環 ……… 35
P L 5 第 4 号墳主体部プラン確認 … 34	第 4 号墳作業風景 …………… 35
第 4 号墳蓋石 …………… 34	第 4 号墳石棺撤去風景 ……… 35
第 4 号墳蓋石完掘 …………… 34	P L 7 第 4 号墳石棺覆土精査 ……… 36
第 4 号墳蓋石配置状況 ……… 34	第 3 号墳調査風景 …………… 36
第 4 号墳箱式石棺内風景 ……… 34	第 3 号墳土層断面 …………… 36
第 4 号墳側壁配置状況 ……… 34	第 3 号墳主体部掘り方完掘 …… 36
第 4 号墳主体部完掘 …………… 34	第 1 号墳遠景 …………… 36
第 4 号墳掘り方完掘 …………… 34	第 2 号墳遠景 …………… 36
P L 6 第 4 号墳北壁部人骨出土状況 35	第 4 号墳調査風景 …………… 36
第 4 号墳南壁部人骨出土状況 35	調査参加者 …………… 36

# I 調査の契機と経過

## 1 調査に至る経過

手賀古墳群は、玉造町大字手賀に所在し、霞ヶ浦（西浦）側へ伸びる細長い行方台地上に立地している。従来把握されていた古墳は2基で、500m以上離れた隣り合った台地に別々に独立した形で所在しているが一つの古墳群として取り扱われてきた。これらは、戦後の施設造成による開発や農地の開墾による古墳の墳丘の削平、盛土利用、石棺の摘出廃棄の古くから伝わる情報があり、周辺にもう少し多くの古墳が存在していたと考えられる。こうしたことから、本古墳群は現在捉えている範囲以上に広い地域に形成されていたと推測され、現在は2基で構成されているものの、以前には多くの古墳が点在していた地域と認識されてきたのである。

こうした状況下で、平成元年初春に手賀古墳群の位置する付近の畑で問題が起きた。春の野菜の植えつけの準備のため、畑を深く耕やすことができる大型のトラクターで農作業中に、石が当たり耕作に支障をきたすし、埋蔵文化財の可能性もあるので確認してほしい旨、地元区長から要請があった。

玉造町教育委員会では、早速この情報と依頼を受け現場に駆けつけた。石が発見された場所は本古墳群第2号墳の隣接する畑で、石は一部が土中から見えるものの、ほぼ完全の形で遺る箱式石棺であることがわかった。また近くを踏査すると、第2号墳を挟みこの石棺と対峙する位置にも石棺のものと考えられる石碎片が散乱していた。このため双方地点をボーリングステッキ等で確認したが、やはり先の石棺1基のみしか確認できなかった。そこで、取り急ぎ応急処置として石棺部をシートで覆い、文化財保護審議会ならびに茨城県文化課の助言指導を仰ぐこととした。

そこで、玉造町教育委員会事務局では社会教育係文化財担当を中心に、新たに発見された古墳を、石棺の確認されなかったものを第3号墳、石棺の確認されたものを第4号墳とし、その保護保存について協議し、茨城県文化課の助言指導を受けるとともに、町文化財保護審議会を開催して対応について幾度となく検討した。

その結果、遺跡・遺構の所在を明らかにし周知を図ってそのまま埋めておくとしても、時が経つにつれ何時しかその存在が忘れ去られ、深耕するトレンチャーや大型農機具により破壊されてしまう恐れがあることから、発掘による記録保存の方向付けがなされた。また、町史編纂事業の中でも終末期の古墳の発掘事例もなく、未開口の箱式石棺の調査もなされたことがないことからこの機会に学術的な調査を行うべきという判断もあり、日本考古学協会の岩松和光氏に依頼し地元の皆様の協力を得て発掘調査をすることに至ったのである。

## 2 調査経過

平成元年1月下旬に茨城県教育庁文化課の指導の下、発掘調査を実施することとなり3月下旬より遺跡周辺の踏査に取りかかった。また、玉造町遺跡調査会と玉造町教育委員会を中心に調査の方法・期間等について打ち合わせを行った。その後の調査の概略については次のとおりである。

4月7日(土) 周辺写真撮影。三角点及び水準点の確認。第4号墳石棺部の位置・規模の確認。

4月9日(月) 発掘器材の現地搬入。測量基準点の移動。現況図測量。第3号墳並びに第4号墳のトレンチ設定。

4月10日(火) 現況図測量。第3号墳トレンチ掘り下げ。同セクション面確認。ローリングタワーより写真撮影。

4月11日(水) 現況図測量。同セクション面確認。

4月12日(木) 第3号墳平面図・セクション図測量。第4号墳トレンチ確認設定並びに掘り下げ調査開始。

4月13日(金) 第4号墳主体部墳丘、南北周溝部トレンチ掘り下げ。主体部掘り方調査のためのベルトの設定並びに掘り下げ。

4月15日(日) 第3号墳主体部平面図測量。  
同清掃並びに写真撮影。第4号墳主体部掘り方確認。第2号墳墳丘平面図測量。

4月17日(火) 第3号墳平面図・セクション図測量終了。第4号墳主体部掘り方用ベルトセクション図測量。石棺部に粘土貼りを確認。地元手賀小学校郷土学習の一環で発掘調査現地見学(5・6年生児童、並びに引率教師3名)。

4月18日(水) 第3号墳主体部ベルト除去並びに清掃。第4号墳石棺平面図測量並びに写真撮影。



PL1 発掘調査風景

- 4月19日（木） 第4号墳石棺天井部貼り粘土の除去。同石棺平面図測量並びに写真撮影。石棺天井板石取り外し除去。天井板石測量。写真並びにビデオ撮影。
- 4月20日（金） 第4号墳石棺内調査開始。人骨並びに金銅製耳環確認。
- 4月23日（月） 引き続き第4号墳石棺内精査。
- 4月24日（火） 引き続き第4号墳石棺内精査。周溝調査のため第2号墳・第3号墳・第4号墳の東側にトレンチ設定並びに掘り下げ。
- 4月25日（水） 第4号墳石棺内及び周溝調査。
- 4月26日（木） 引き続き第4号墳石棺内精査。第2号墳北側トレンチ設定・掘り下げ並びにセクション図測量。第3号墳北側トレンチ設定・掘り下げ並びにセクション図測量。
- 4月27日（金） 第2号墳東・南・北側トレンチ設定・掘り下げ並びにセクション図測量。第3号墳南側セクション図測量。第4号墳石棺内精査・人骨取り上げ並びに測量。各トレンチ埋め戻し。
- 4月28日（土） 各トレンチ埋め戻し。第4号墳石棺撤去し手賀地区公民館へ移送・保存。調査地区の清掃。器材の撤去。



## Ⅱ 遺 跡 環 境

### 1 遺跡の立地

茨城県の中央よりやや東南に位置する行方郡玉造町は、Y字状に南北に伸び北西から南西部は霞ヶ浦に面している。当地方は霞ヶ浦と紫峰筑波を望む風光明媚な温暖な土地柄で、『常陸国風土記』にもその豊かな自然が紹介されている。玉造町を二分する一級河川梶無川流域と霞ヶ浦湖岸沿いは沖積低地となり肥沃な水田地帯を形成している。

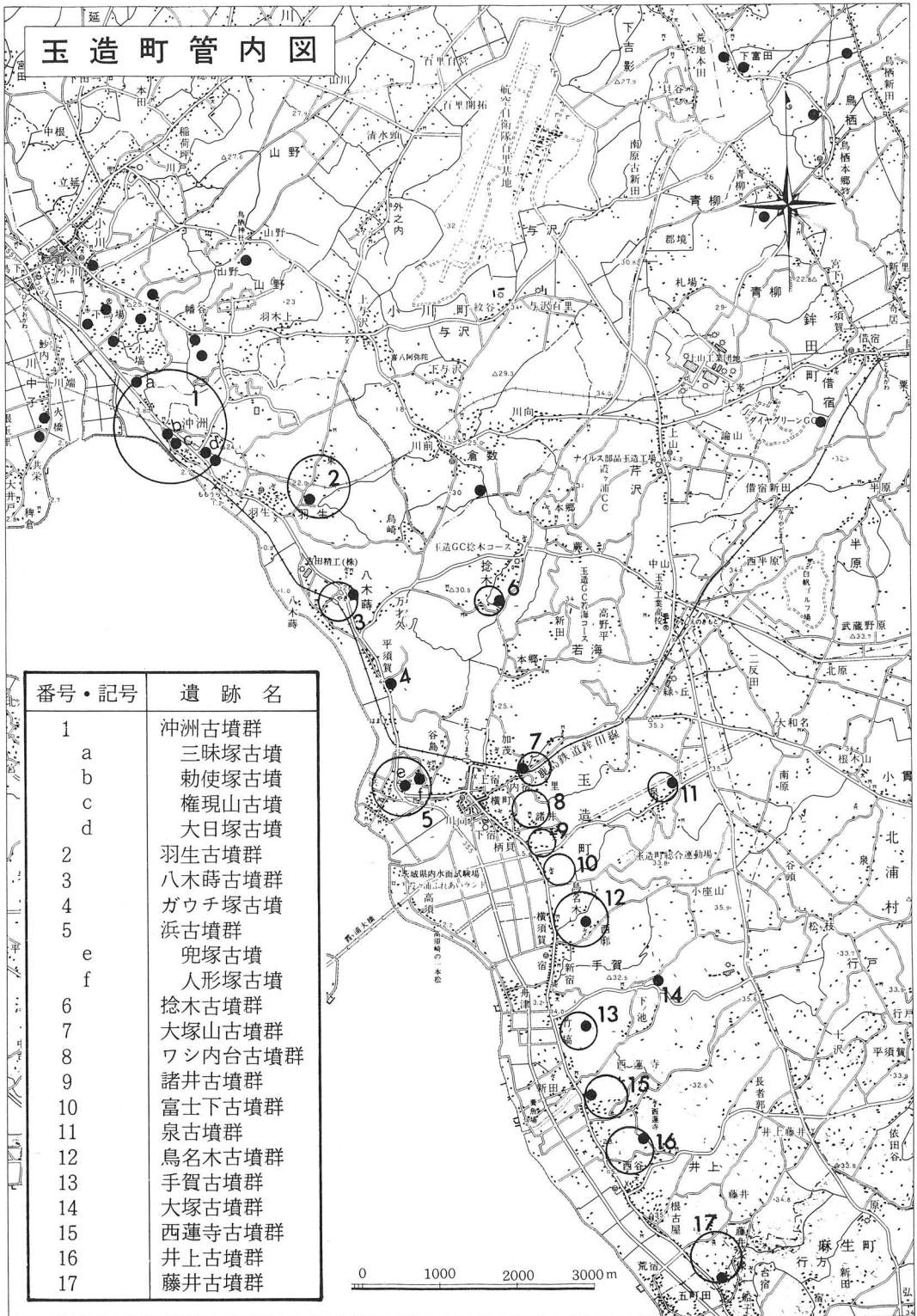
また、多くの遺跡が分布する丘陵地は標高25～35mの石岡台地と行方台地から成り、多くの開析谷が細長く切り刻んでいる。この台地は、成田層あるいは下総層群とよばれ、多くは13万年～9万年前に堆積した比較的厚い砂層とそれより薄い泥層や礫層からできている。成田層の上には関東ロームが堆積している。台地と低地の比高差は20～30mに及ぶ。

手賀地区の現在の集落は、大きく5地区に分けられ集落の歴史的発達過程を今に伝えている歴史地理的にも重要な場所として知られる。ひとつは南北に走る国道355号線沿いに発達した横須賀・宿・竹之埜地区、湖岸に密集して形成された半農半漁村の舟津地区、北陸の散村形態を示す新田地区、中世城館の周辺根古屋地区に形成された地区、そして台地や谷津沿いに点在する小座山・下ノ池地区に大別される。

手賀地区は玉造町でも肥沃な土地を生かしての農業あるいは水産業が盛んで、低地での稲作はもとより台地では野菜の有機野菜栽培や無農薬野菜栽培等のグループが形成され市場で注目されている。そのほか果樹・花卉園芸や畜産関係の優良農家も多い。霞ヶ浦での伝統的漁業のほか、鯉・金魚の養殖は全国屈指の生産量を誇っている。

手賀古墳群は、玉造町の中央やや南東部、大字手賀のほぼ中央に位置している。この地域は、手賀でも最大の纏まった平坦面を有しており、各時代の多くの遺跡が分布する。当台地は大きな新宿谷津と下ノ池谷津に挟まれ、両谷津の奥尖上には行方地方特有の溜池が造られている。古墳時代から造られたとされ、江戸時代後半に現在の大きさにまで発展した。

当古墳群は霞ヶ浦へ向かう樹枝状に伸びた台地上にあり、今回調査した地域を中心に広がりを見せ、字鏡内2027番地ほかに、字竹の埜等にも分布している。現存の古墳の他にも石棺の一部と考えられる雲母片岩板石の発見例もあり、同地域に古墳が集中していることがわかる。また同じ手賀地区で北東にあたる同じ台地の延長くびれ部には方墳とされる大塚古墳があり、北には鳥名木古墳群が分布している。他地区の古墳群に比べ中型古墳が認められておらず、現状で小規模古墳で構成されているのが特徴である(第2図)。



第1図 玉造地方の古墳

## 2 遺跡と周辺の歴史

手賀地方は、各種の資史料から玉造町で最も各時代の歴史過程を理解できる地域として注目される。更に、原始古代社会の遺跡数も多く貝塚が集中しているのが特徴である。ここでは、周辺の遺跡から時代別に探り本遺跡を概観してみる(第1図)。

岩宿時代(旧石器時代)の遺跡は、発掘調査の例もないが隣接する玉造町玉川地区で調査された井上古墳群第4号墳の墳丘覆土中から柳葉尖頭器が出土した例がある(註1)。また、同じ手賀地区でも字唐ヶ崎の台地からの発見例も確認できる(註2)。しかし、正式な分布調査や試掘調査も実施されていないことから、本地域の当時の生活を語ることは難しい。

縄文時代は、手賀古墳群を占拠する台地をはじめ農地として利用されている場所の多くが遺跡となっている。中期・後期の遺跡が中心で、八幡平貝塚、西内貝塚、堀ノ内貝塚がありどれも中規模の集落跡と考えられる。

弥生時代は、先の井上古墳群第4号墳の覆土中と玉造町北部大字芹沢の東茨城郡小川町境に所在する平遺跡出土土器(註3)が知られる他は未調査のため報告がない。本地域でも土器片が散見するに過ぎない。

古墳時代の遺跡は、古墳群を形成する形で多くの古墳が保存されてきているが、集落址としての現在までに把握されている遺跡はその古墳の遺跡数に比べ極端に少ない。玉造地方の古墳は沖洲古墳群に代表され、茨城県では古式の古墳である勅使塚古墳や沖積地に周溝を有して造られた三味塚古墳をはじめ、当地方では稀な横穴式石室類似施設をもつ帆立貝式古墳である後期初頭の大日塚古墳、その他権現山古墳、延戸古墳、そして終末期の八重塚古墳群へと時代が辿れる。その他の地域でも小規模ながら大字単位で古墳群が形成されており、霞ヶ浦(西浦)あるいは梶無川へ向かう舌状台地には多くの古墳が造営されたのである。しかし、北浦湖岸地域と比べ大規模な古墳群を形成せず、時代的・地域的な古墳文化の違いが想定される。

また、当町における古墳時代の代表的な集落址には、玉造町甲泉地区の原遺跡(註4)と手賀古墳群の近くに位置する荒原神社馬場前遺跡(註5)がある。未踏査のため古墳造営に関わった同時代の人々の暮らした生活の拠点が余り確認されておらず、古墳時代から『常陸国風土記』の世界を再構成するには、踏査や発掘調査等の遺跡からの追跡と古気象学や陸水学等の自然科学の視点が必要である。特に、現在の環境と古景観や古地形の対比は原始古代社会の基礎を知る上で重要であると考えられる。そして、原始古代の時代史を日本全体の流れと地域的な流れの相対的情報分析を行い、その時代の社会の再構成を試みる時期に来ているのではなからうか。

## Ⅲ 調査成果

### 1 手賀古墳群の概要

手賀古墳群は、昭和62年度『茨城県遺跡地図』（茨城県教育委員会）にみる県No.1547の「手賀古墳群」であり、円墳2基の存在を挙げている。1基は、大字手賀竹之埜地区字台の山の舌状台地屈折部に占拠し同地区の最高標高点を造っている。また、1基は同地区字鏡内に方形の墳丘を遺している。

しかし、手賀古墳群の構成は古墳時代当時円墳2基だけというものでなかったことは、各種の資料と地元古老からの聴取からも確認できる。

昭和34年に茨城県教育庁社会教育課では『茨城県古墳総覧』を刊行した。遺跡認識の第一歩としてまず古墳が調査されたと思われ、各市町村で活躍する郷土史家等の協力のもとに分布調査がなされ多くの古墳が行政で把握されることになった。手賀古墳群はこの時天満宮古墳（現在の1号墳）のみが調査報告されている。現在の地域で捉えた場合すでに多くの古墳の墳丘が失われていたか未踏査ということになる。この調査に続いて昭和39年度には、茨城県教育委員会が『茨城県遺跡地名表』を刊行し古墳以外の遺跡の周知に乗り出した。この資料では古墳の形態や数が示され、名称も手賀古墳群が用いられ円墳9基の調査記録となっている。このとき手賀地区の大塚古墳や鳥名木古墳群が新たに調査され掲載されている。

この後市町村でも国県の指導のもと文化財保護条例や規則の制定がなされ、埋蔵文化財の周知や保護保存を目的に台帳整備がなされるようになった。合わせて県教育委員会では『茨城県遺跡地図』を昭和44年度、昭和49年度、昭和62年度と発行してきている。

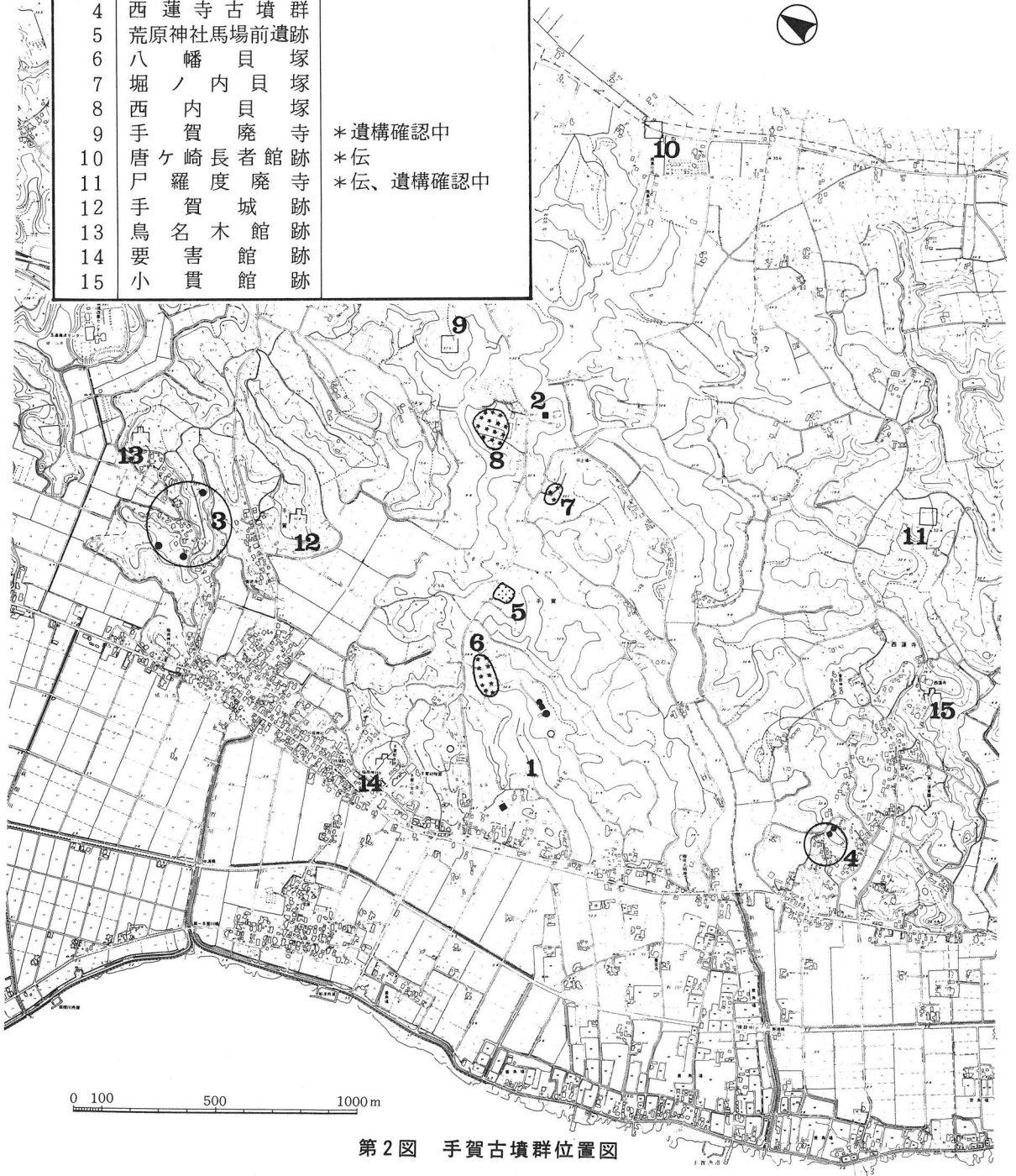
こうした間にも、手賀古墳群にも盗掘や開墾等による古墳湮滅の危機があり、いくつかは墳丘の削平や石棺の廃棄が行われたと推測される。

以上のような手賀古墳群の保全の歴史を裏づけるように、今回の調査で古墳群を構成していた古墳が2基確認できたことは大きな成果である。次に現存する古墳の特徴を次に示す。

第1号墳 手賀古墳群では最南端の古墳で竹之埜集落の北側に位置し、標高約32mの台地にあり、天満宮が祀られている。現況では円形を呈し、直径約22m、高さ3.5mの中規模な古墳である。

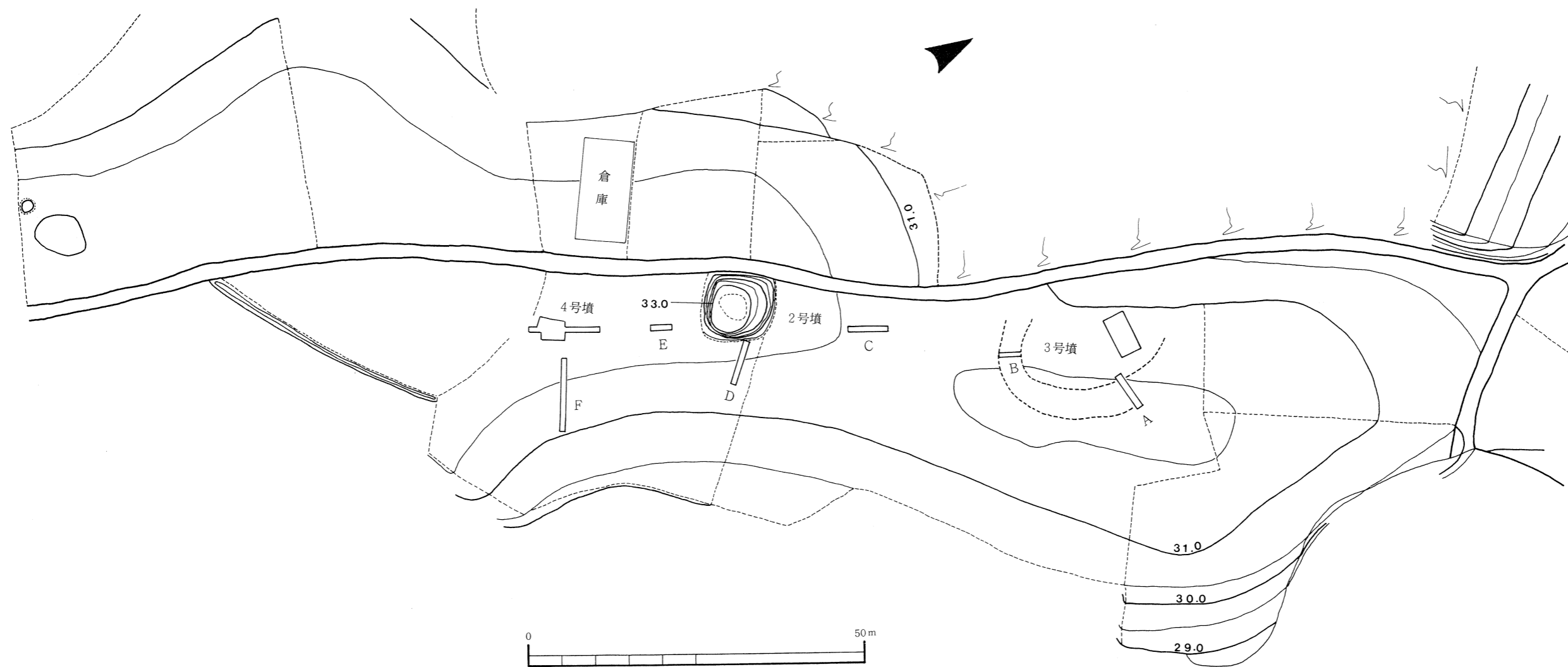
第2号墳 第1号墳の所在する台地と谷を挟んで隣接する台地中央部に遺る古墳で、現況では方形を呈し一辺が6mを測る。高さ2mを有し新たに発見調査された第3号墳、第4号墳と同地区にある。

番号	遺 跡 名	備 考
1	手賀古墳群	●は現存、○は湮滅
2	大塚古墳群	
3	鳥名木古墳群	
4	西蓮寺古墳群	
5	荒原神社馬場前遺跡	
6	八幡貝塚	
7	堀ノ内貝塚	
8	西内貝塚	
9	手賀廃寺	* 遺構確認中
10	唐ヶ崎長者館跡	* 伝
11	尸羅度廃寺	* 伝、遺構確認中
12	手賀城跡	
13	鳥名木館跡	
14	要害館跡	
15	小貫館跡	



第2図 手賀古墳群位置図





第3図 手賀古墳群調査区設定図

## 2 第3号墳

### (1) 遺構

当古墳は、第2号墳の北東に位置し現況の第2号墳の中心から5.5m、同時に発掘調査を行った第4号墳の主体部からは8.5mの直線上にある。墳丘は開墾による削平で確認出来なかったが第4号墳の調査による際の聞き取りと雲母片岩の破片の散布によって調査されたものである。

調査は、現況が平坦な畑であるため、雲母片岩破砕地点を見かけの主体部として、十字型に土層確認用のベルトを設け、4分割した区域を掘り進めた。耕作土は平均20cmを有し、その下は自然堆積層となっている。

墳丘の構築状況については、主体部の周辺あるいは周溝と続いて調査を行ったが自然堆積層へ積み上げたと考えられる盛り土・封土は確認されなかった。しかし、周溝調査の結果より当古墳の墳丘は1.5mから2.0mの規模を想定できる。

周溝は、主体部の東側と南側に設けた2本のトレンチで確認した。北側と西側は道路と傾斜地のため調査は行えなかった。調査地はトレンチャーによる攪乱が甚だしく、土層に不明確な部分もあるが周溝の存在は認められた。

東側トレンチは、特に攪乱が大きい周溝状の掘り込みを確認できた。その部分には幾度かのトレンチャーの掘った痕跡があり、周溝と想定される周辺の自然堆積層までもトレンチャーにより破壊されている。しかし、周溝の覆土と考えられるロームブロックを含む暗褐色層が40cm幅で底部を構成している。深さは現在の地表面から約70cm下がる。形態は不明であり、周溝幅も正確には掴めないが1.5mは越えない。

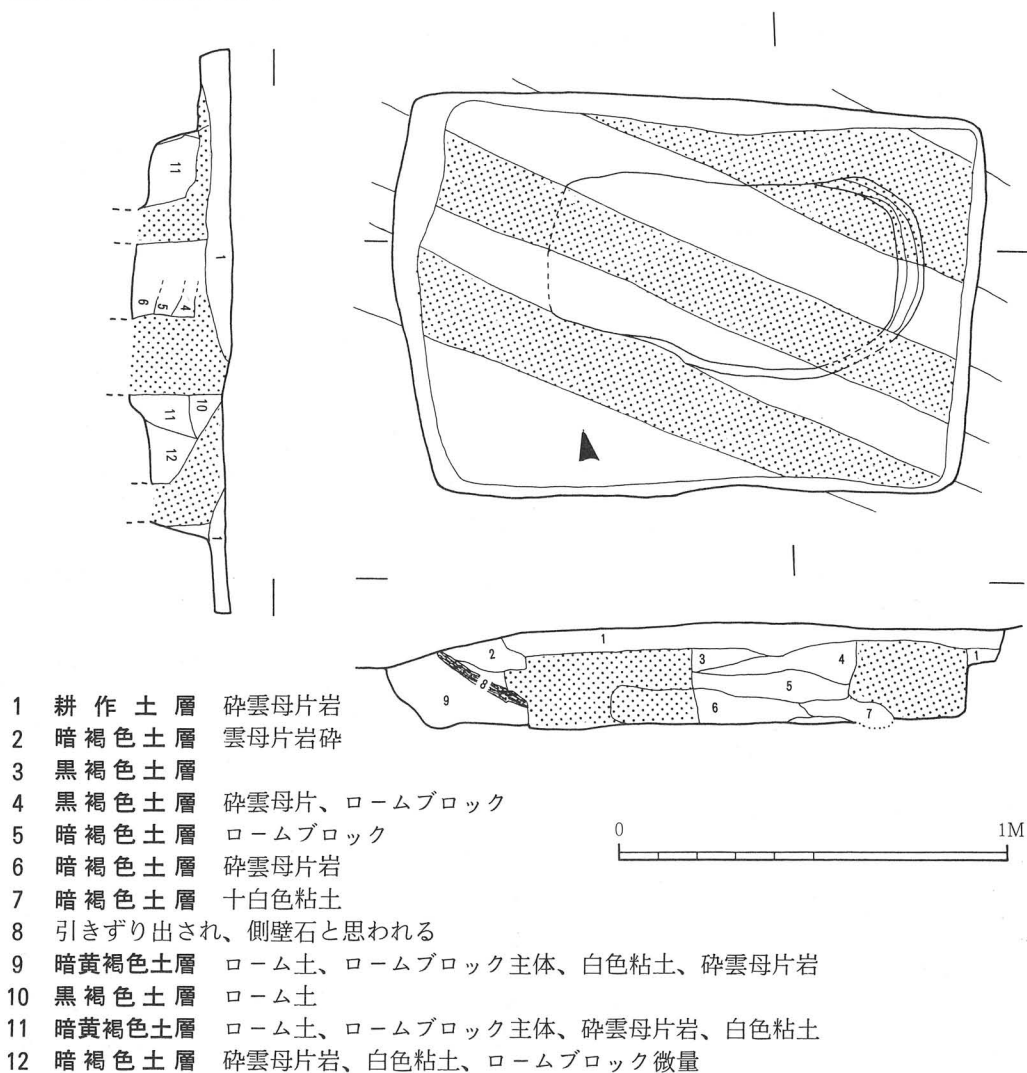
南側トレンチは、東側同様に攪乱が大きい周溝状の掘り込みを検出した。20cmの耕作土の下にロームブロックの混在した黒褐色の層があり、またその下には暗茶褐色層が認められ、これらの層は周溝の覆土と考えられる。形態は底部が緩やかな弧を描く逆台形状を呈し、現在の地表面から約60cmの深さを有している。しかし、周溝の立ち上り部分とトレンチャーの掘り込みが方向・幅とも重なり周溝の正確な幅は計測できないが1.8m以下である。

主体部は、墳丘の削平後近年のトレンチャーの使用による農作物の取り入れの際、作業に障害になるため石棺は撤去され失われていた。この古墳主体部を構成していたのは、霞ヶ浦周辺の終末期古墳に多い一定していない位置の箱式石棺であり、その掘り方が墳丘中央部より北東側周溝際に残存していたことから確認できた。長軸線はN-80°-Wで長さは最長1.48m最短1.39mを測る。幅は最長で0.95mを有し、深さは概0.22m値を示す。また底部中央に長軸に並んで

0.88 m、幅 0.34 m、深さが 1～2 cm 一段低くなっている隅丸方形の凹区域を有している。覆土も含め雲母片岩碎片が多く検出できたが、特にこの凹区域に密集している。

## (2) 遺物

主体部の箱式石棺の撤去と同時に埋葬されていた人骨や副葬品等もすべて同時期に失われており、骨片も検出されなかった。近年では昭和 60 年に農作業中消滅した玉造町加茂地区乙荒内平古墳と同様に、大型トラクターによる等大胆な除去作業が行われ、人骨・副葬品ともに畑土中に攪拌された可能性が強い。



第 4 図 第 3 号墳主体部平面・断面実測図

### 3 第4号墳

#### (1) 遺構

当古墳は、第2号墳の北西に位置し第2号墳の中心から27mの直線上の位置にある。墳丘は第3号墳と同様に削平されており確認できなかったが、調査の契機にもなったように大型農機具による耕作中に石棺が発見された。このためボーリングステッキ等による石棺の規模の確認後調査区の設定を行い主体部を中心とする調査を実施した。

調査は、区域がなだらかに東側へ傾斜し隣接する畑では作物を栽培していることから、確認してある石棺の規模を基本として、主体部に十字型の土層確認用のベルトを設け掘り進めた。耕作土は平均15cmを有し、その下に雲母片岩が検出できた。天井石の周辺は、目張り用の粘土と褐色土の覆土で構成されている。

墳丘は、耕地の深耕にともない削平されトレンチャーによって自然堆積層面までも攪乱状態にある。墳丘の構築状況については、周溝の調査と関係づけて行ったが自然堆積層へ積み上げたと考えられる盛り土・封土は確認されなかった。また合わせて行った周溝調査の結果でも攪乱が著しく当古墳の墳丘規模を特定できる遺構は発見されなかった。

周溝については、東側にトレンチを設けその存在と規模を調査した。北側は第2号墳の関係でトレンチを入れた。西側は道路により、南側は作物栽培中のため調査は行えなかった。調査地はトレンチャーによる攪乱が甚だしく不明確であり周溝確認は困難を極めた。東側トレンチでは、主体部より約4m付近に黒褐色の覆土が1.2m幅で確認できたが、周溝と断定できるものではなかった。

主体部では、墳丘は削平されたがほぼ未開口の状態です母片岩の箱式石棺が発見された。遺跡の所在する畑もトレンチャーによる耕作はあったが、石棺周辺は畑中の石塊障害物として避けられていたことにより保護されてきた。この古墳の主体部である箱式石棺は、天井石4枚、側壁石10枚、そして底部は箱式石棺構築の整形碎片石が丁寧に配されている。石の大きさは6匁のように規格に添い整形されており、長さ約1.8m、幅0.6m、深さ0.7mの四角柱状の埋葬空間を有する。長軸線はN-47°-Eを呈し、第3号墳とは方向が一致せず、また周溝・墳丘とも明確でないことから霞ヶ浦周辺の終末期古墳特有の変則位置型箱式石棺であるともいえない。その掘り方は、掘り込み部の長さは最長2.84m、幅は最長で1.71mを測る。また箱式石棺埋め込み部の長さは最長1.8m、幅0.95m、深さは現況の地表面から0.82m下がる。北端の天井石には0.25m四方の把手状の付き出し部がある。

## (2) 遺物

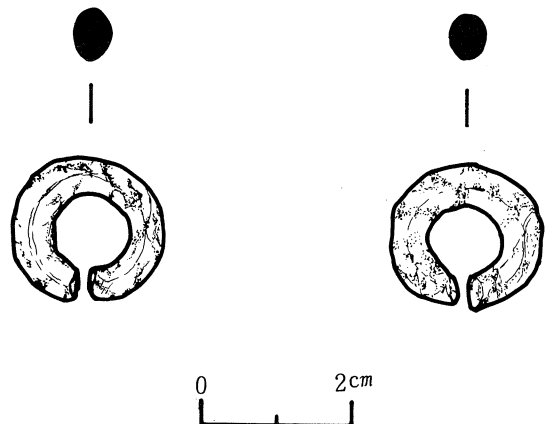
当古墳の遺物は、埋葬施設である箱式石棺内の人骨と金銅製耳環だけである。石棺内の堆積土を精査したが鏡、玉類、鉄製品の副葬品は確認できなかった。周溝調査では、土器片や埴輪片も検出できなかった。

人骨は、頭骸骨のほとんどが北北東向きの石棺の北側に集中して出土しており、把手状造り出しのある蓋石の下に位置している。幾度かの追葬が行われたため骨がまとめられている箇所もある。

鑑定の結果から、手賀古墳群第4号墳出土の人骨は5個体が埋葬されたと考えられ、壮年男性1、壮年後半から熟年男性1、壮年女性2、性別不明1となる。当町における古墳時代の人骨調査分析事例は今までに二つある。一つは6世紀初頭の前方後円墳三昧塚古墳であり、埋葬施設の箱式石棺から1個体が発見され、もう一つは6世紀後半に造られた（円墳か前方後円墳確定はできない）井上古墳群第4号墳からもやはり箱式石棺から1個体出土している。これらは一古墳一被葬者の形式であり、今回の追葬例ははじめてであり貴重な資料となった。詳しくは第5章を参照されたい。

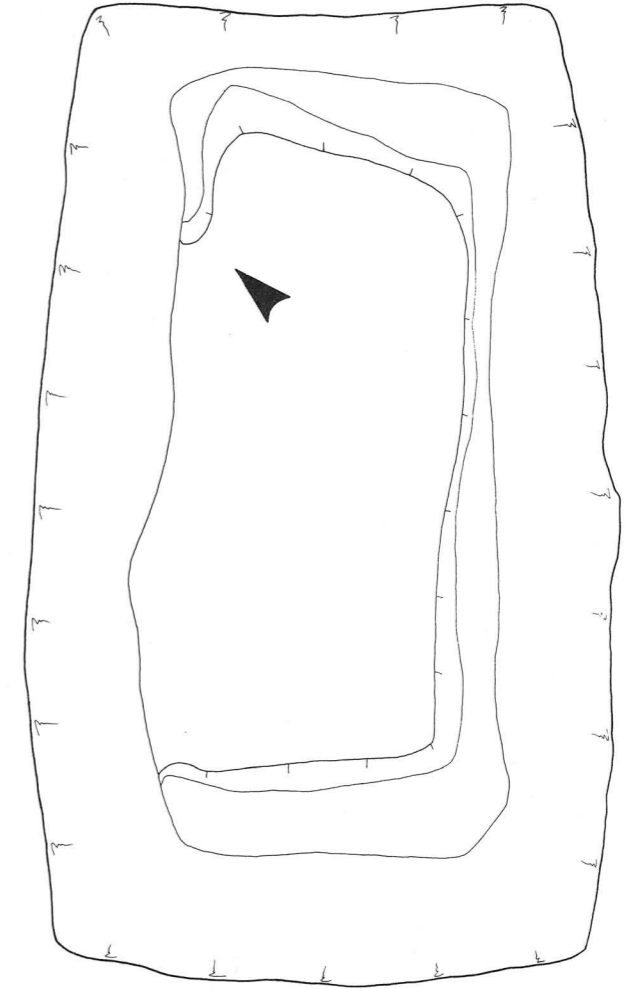
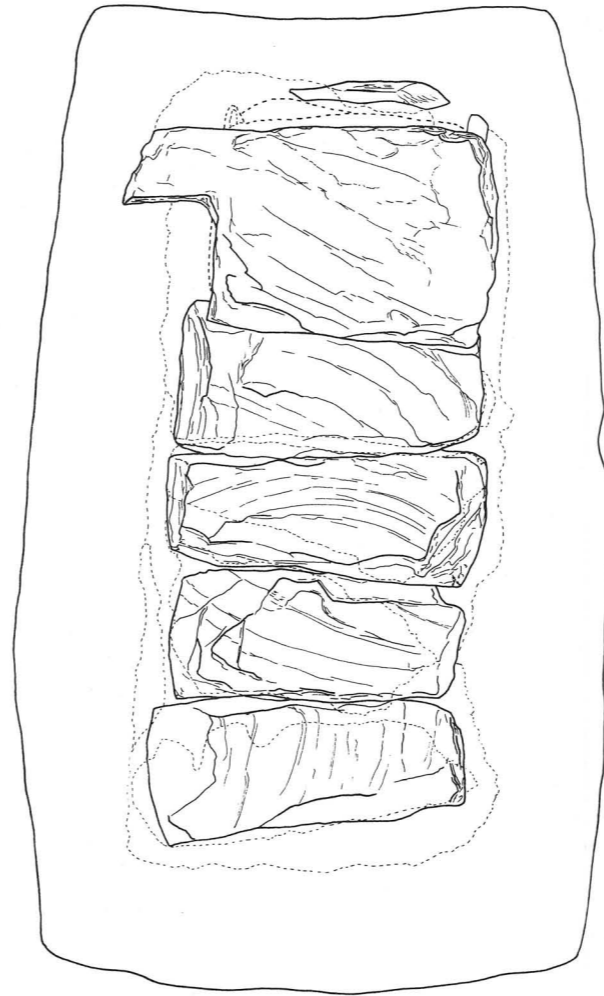
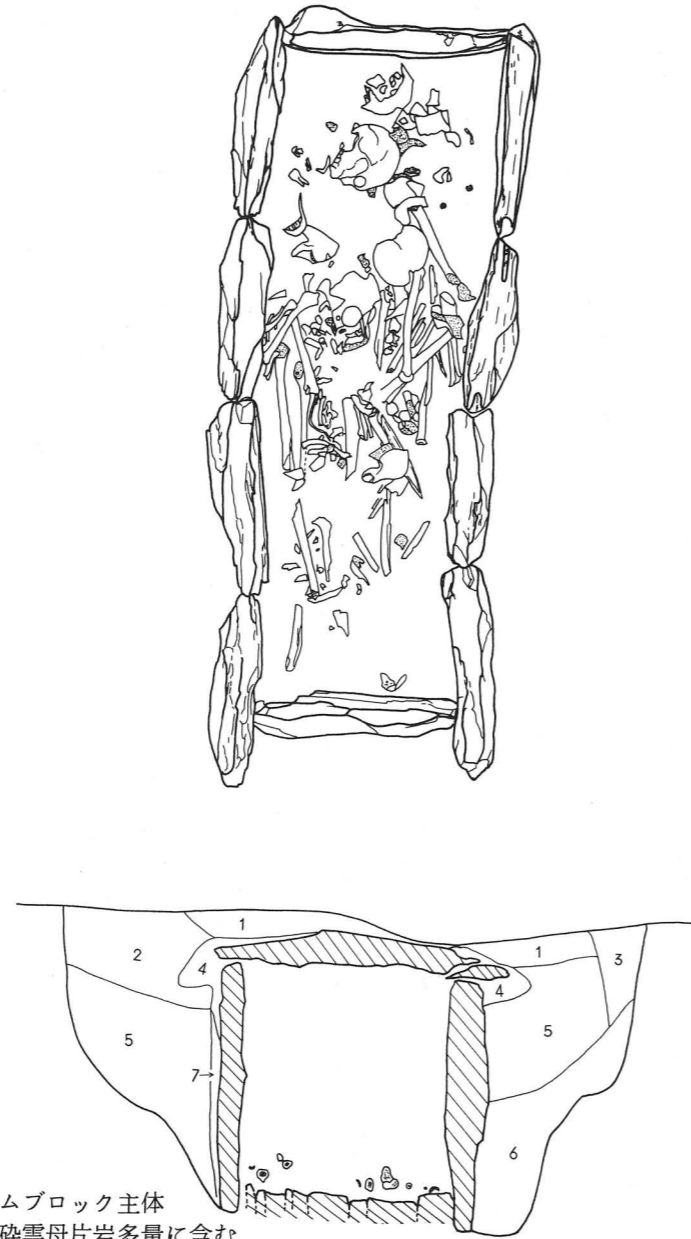
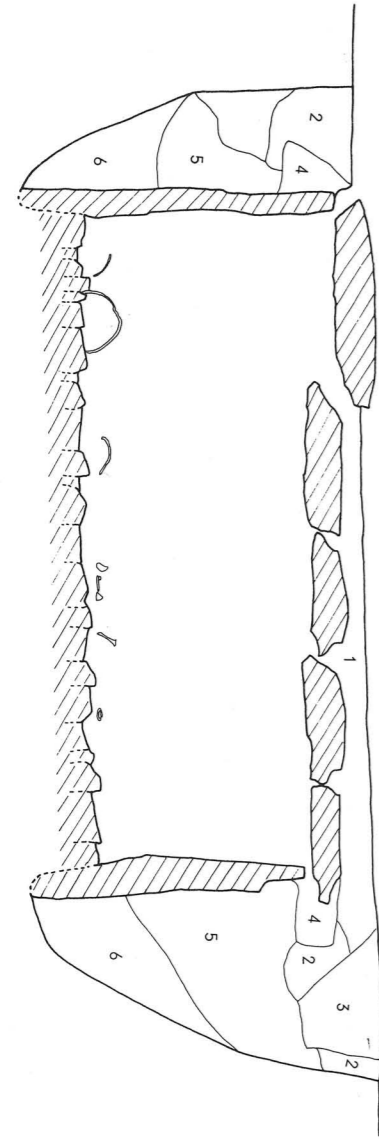
埋葬施設への盗掘口は確認されなく、副葬品としては僅かに金銅製耳環が一对発見されただけである。出土地区は、北側の側壁近くの頭蓋骨の付近であり、No.1は、外径2.0cm、内径1.0cm、最大環径、0.45cm、重さ7.8gである。環切れ幅は0.1cmを有する。

No.2もほぼ同じ形態を持つが、重さ7.4gで、環切部分切り口一方が鋭角である。



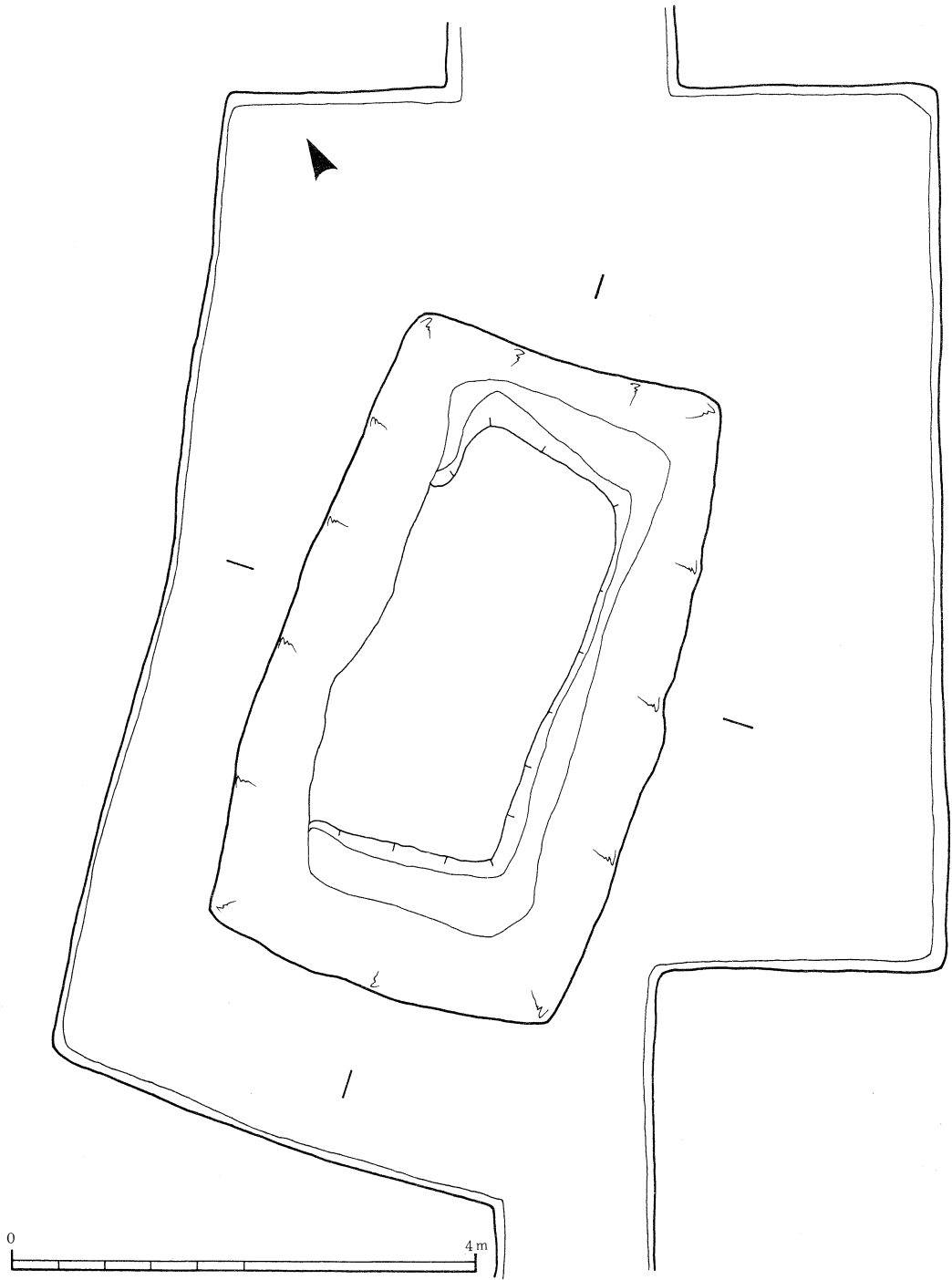
第5図 第4号墳出土金銅製耳環実測図





- 1 暗褐色土層 ローム土・ロームブロック主体
- 2 暗黄褐色土層 白色粘土粒子・碎雲母片岩多量に含む
- 3 暗黄褐色土層 ローム土・ロームブロック・碎雲母片岩少量含む
- 4 暗褐色土層 白色粘土・碎雲母片岩を含む
- 5 黄褐色土層 ローム土・ロームブロック主体・碎雲母片岩微量含む
- 6 黄褐色土層 ローム土・ロームブロック主体・碎雲母片岩を少量含む
- 7 灰褐色土層 白色粘土

第6図 第4号墳主体部平面・断面実測図



第7図 第4号墳主体部掘り方平面実測図

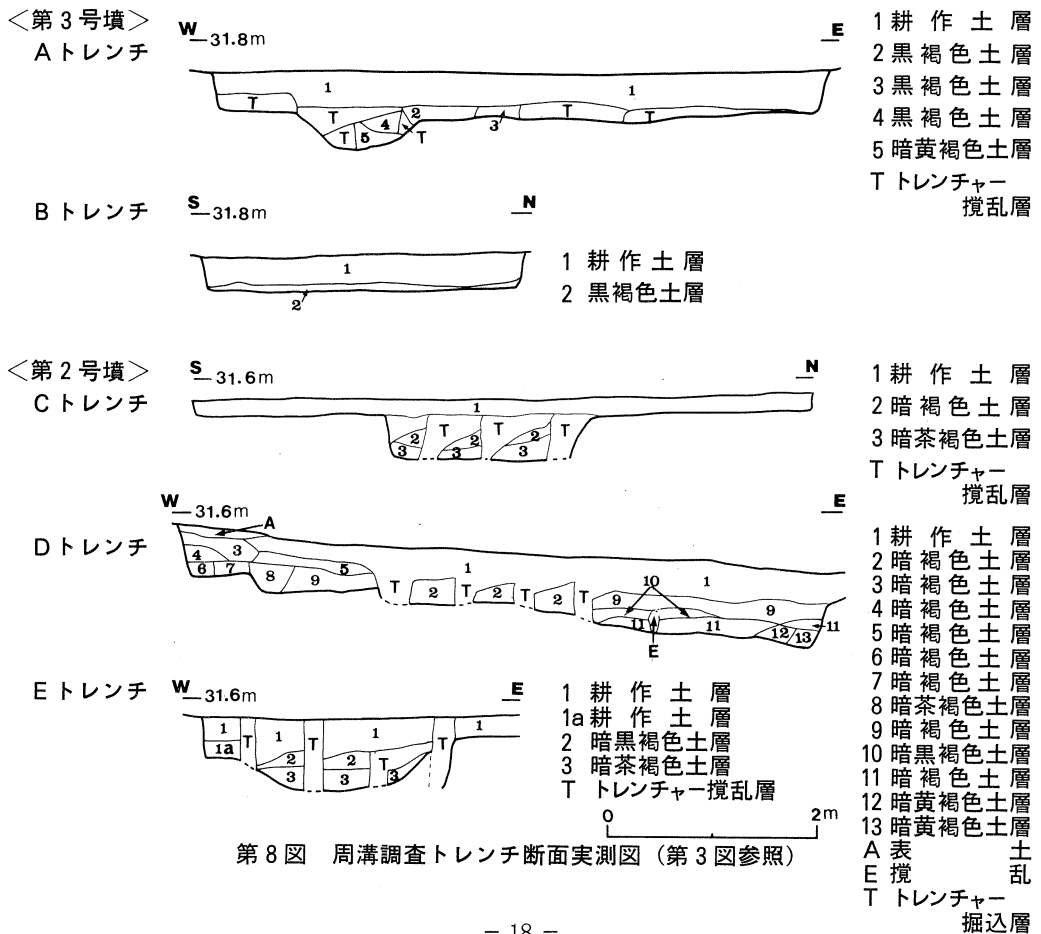
#### 4 その他の遺構と遺物

##### (1) 第2号墳

今回の調査で新たに確認された第3号墳と第4号墳の間に位置し、雑木で塚全体が覆われている第2号墳は、昭和39年の空中写真にもその姿を見せほとんど削られないで現在まで保存されている。しかし、その他の古墳はこの時期の写真にも墳丘らしき起伏もなく第2次世界大戦後の開発、あるいは江戸後期の開墾等によって墳丘は失われたものと思われる。

第2号墳の調査は、農作業にも支障をきたす恐れもなく、現状保存を基本とする埋蔵文化財保護の立場から墳丘規模と周溝の確認に絞って実施した。

墳丘は、現存の形態が一辺約10mの方形を呈し、高さも約2mを測る。周溝調査のため北側の第3号墳との間にCトレンチを、東にDトレンチ、南側の第4号墳との間にはEトレンチを設定した。どの調査区もトレンチャーの攪乱が大きく土層の確認が明確にできなかった。しかし、トレンチでは幅約2mの弧を描く周溝状の窪みを検出できた。



## 5 人骨鑑定結果

### 手賀 4 号墳出土人骨

国立科学博物館人類研究部

梶ヶ山真里 馬場 悠男

#### 1 はじめに

手賀 4 号墳は、茨城県行方郡玉造町大字手賀字鑑内に位置し、平成元年に玉造町教育委員会によって発掘された。人骨は石棺より出土し、保存状態は良くない。ほとんど本来の配列を保っておらず、二次的に集骨されていたり、また、散乱した状態で出土している。以下、部位ごとに述べていく。また、本文中の番号は第 9 図ならびに表 3 に付けられたものと一致する。

#### 2 出土人骨

##### 頭 蓋

比較的保存の良いものから破片まで 5 個体分の頭蓋が保存されている。

No. 92 頭蓋 前頭部から頭頂部にかけての脳頭蓋が残っている。顔面や頭蓋底は細かい破片のみ保存されている。

輪郭は卵円形である。頭蓋最大長は約 18 センチ、頭蓋最大幅は破損のためわからない。頭蓋最大長は、近畿地方古墳時代男性平均 181.7 ミリに近い。冠状縫合の走向は単純で、矢状・人字縫合は複雑である。頭頂孔は左右とも開存している。外後頭隆起の発達は良くない。乳様突起は比較的良く発達し、垂直に下垂している。外耳孔は楕円形で中程度の大きさである。残っている右側には外道骨腫は認められない。右下顎窩は深い。左は破損していて不明である。

この頭蓋は、比較的大きく、骨質は頑丈な印象である。乳様突起も比較的大きく男性的であるが、外後頭隆起はなめらかであり張り出していないので、性別は女性の可能性が高いとしたい。頭蓋内板では、人字縫合は開離しているが、冠状・矢状縫合はとじている。外板でも矢状縫合の一部分は癒合しており、ラムダ付近で骨吸収がみられる。また、この頭蓋に伴う遊離歯（上顎第 2 切歯、上顎犬歯、上顎小臼歯）が 3 点ある。歯の咬耗は、いずれもブロカの II 程度である。これらのことから、この個体は壮年期後半であると推定できる。

No. 111 頭蓋 顔面から頭頂部、そして右側頭部にかけてが保存されている。輪郭は不明であるが、顔高が高く顔幅も比較的広い（表 1）。頭骨最大長は 20 センチ、最大幅は 16 センチ

表 1 第 4 号墳頭骨計測値

計 測 項 目	頭 骨 番 号
	No. 1 1 1
1. 最大長	—
5. 頭骨底長	—
8. 最大幅	—
8:1. 頭長幅指数	—
9. 最小前頭幅	9 6. 6
9:8. 横前頭・頭頂指数	—
17. バジオン・ブレグマ高	—
17:1. 頭長指数	—
17:8. 頭幅高指数	—
45. 頬骨弓幅	( 1 3 3 )
46. 中顔幅指数	1 1 2. 0
47. 顔高	—
48. 上顔高	7 2. 1
48:45. コルマイン上顔指数	—
48:46. ウルヒョウ上顔指数	—
51. 眼窩幅	4 4. 2
52. 眼窩高	3 7. 0
52:51. 眼窩指数	8 3. 7
54. 鼻幅	2 9. 5
55. 鼻高	5 6. 7
54:55. 鼻指数	5 2. 0



程度である。矢状縫合の一部と人字縫合は破損しているが、縫合の走向は比較的単純である。側面からみると、眉間の隆起は強く鼻根部の陥入部も比較的深い。しかし、鼻骨は狭く、古墳時代人として矛盾のない特徴である。やや突顎である。側頭線は明瞭であり、乳突上稜の形成も明瞭である。側頭窩は深く、頬骨弓も頑丈である。外耳孔は卵形で大きい。外耳道骨腫は認められない。貧血の影響によると言われるクリブラ・オルビタリアはない。しかし、頭骨断面の板間層が非常に厚く1～1.5センチの層を形成していることが興味深い。

上顎の歯の保存状況は以下の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 ○ | 1 2 3 4 5 6 7 =

○は死後脱落    =は歯槽閉鎖

歯の咬耗はプロカのⅢ程度である。歯の形態で特別なことはない。

この頭蓋は、非常に大きく、骨質が厚く頑丈である。また、乳様突起は強大で、眉間や眉弓の隆起も明瞭であることから明らかに男性個体である。冠状縫合においては、内板では完全に癒合消失しており、外板では一部で閉鎖が始まっている。矢状縫合は内・外板とも開離している。また、歯の咬耗はプロカのⅢ程度である。以上のことから、この人骨は壮年期の個体と推定できる。

**No. 119 頭蓋** 保存状態は悪く、頭頂部から左側頭部にかけての一部しか残っていない。骨質が頑丈で板間層が非常に厚い。外耳孔は、円形で大きさも大きい。また、外耳骨腫は認められない。乳突上稜の発達は良好である。アステリオン骨が認められる。下顎窩は比較的大きく深い。また、頭骨内板のクモ膜顆粒小窩が明瞭である。

性別については、左乳様突起は強大でやや前よりに下垂していること、全体的に頑丈な印象で、骨質も厚くしっかりしていることなどから、男性と推定できる。年齢は、冠状・矢状縫合の内板が完全に癒合消失し、外板でも一部は癒合消失始めていることから、壮年期後半と考えられる。

**No. 94, 95 頭蓋** 前頭部からバジオン部が残っている。わずかに残っている左の眉弓は隆起している。鼻根の陥入はやや浅い印象であるが詳細は不明である。眼窩上縁部は比較的薄い。したがって、性別判定は難しいが、やや男性的と思われる。縫合は、冠状縫合では内・外板とも完全に癒合消失し、矢状縫合では外板の一部に縫合の痕跡を残すのみで癒合消失している。クモ膜顆粒小窩も明確である。よって、年齢は壮年期後半といえよう。

**No. 104, 105 頭蓋** 頭頂部しか残っておらず風化が激しい。全体的な輪廓は想像できないが、ゴツゴツした印象である。人字縫合は開離しているが、矢状縫合の外板の一部で癒合が始まっている。骨断面は他の頭蓋骨と同様に板間層が厚い。この頭蓋も、男性的ではあるが性別不明である。年齢は壮年と推定される。保存状態が悪いのでこれ以上の言及はさけない。

No. 77 下顎骨 右下顎枝は破損しているが、それ以外は比較的保存が良い。オトガイ隆起およびオトガイ結節もあまり発達しておらず。歯は、死後に脱落したものがある。歯の咬耗は進んでおりブロカのⅡ～Ⅲ程度である。歯槽の退縮もみられる。要するに壮年後半期から熟年期と考えられる。この下顎骨が上記の5点の頭蓋のうちのどれと一致するかは確定はできないが、出土位置および性・年齢より、No. 92 頭蓋に伴う下顎骨である可能性が高い。歯の詳しい保存状態は以下の通りである。

6 5 ○○○○ | 1 2 3 4 5 6 ××

×は生前脱落

○は死後脱落、歯槽閉鎖

下顎骨 No. 91 右側が残っているが大部分は破損している。歯は植立していない。第1・第2・第3大臼歯は生前に脱落、歯槽は閉鎖している。老人性の退化と考えられる。なお、この右下顎枝と対になる破損した左下顎体が残っている (No. 116)。歯槽が閉鎖しており詳細は不明である。

また、遊離歯が14点確認できる。

その他に、個体の判別は難しいが、側頭骨錐体が3点 (右2、左1)、上顎骨1点が保存されている。上顎骨は小片であり、歯も植立していない。

### 体幹骨

右 (No. 65) ・左 (No. 33) 肩甲骨、脊椎骨、そして肋骨が、不完全であるが保存されている。鎖骨は右 (No. 36) ・左 (No. 60) 保存されている。中央断面指数 (中央垂直径/中央矢状径) は右 89.2 (13.2/14.8) 左 95.1 (13.6/14.3) で近畿地方古墳時代男性より大きい。2点とも両端が破損しているにもかかわらず、長く太い印象である。筋肉付着面も明瞭である。明らかに左右が対で、男性であろう。

寛骨は、右 (No. 72, 84) ・左 (No. 25, 75) それぞれ2点ずつある。そのうち右のNo. 72 は、恥骨の一部と腸骨翼の一部が破損しているのみで比較的保存がよい。寛骨臼が大きく、深い。大坐骨切痕は鋭角である。残りの3点は保存が悪く詳細は不明である。しかし、左のNo. 75のわずかに保存されている寛骨臼はNo. 72と似ており、互いに対である可能性が高い。

表 2 第 4 号墳出土四肢骨計測値

計測項目	手 賀 4 号 墳		古墳時代人(城)				縄文時代人(三貫地)		関東現代人	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
上腕骨	No. 59 (r)	No. 67 (l)	No. 89 (r)							
5. 中央最大径	24.0	24.5	19.0		22.6	21.5	23.4	19.6	22.4	20.4
6. 中小最小径	19.4	18.6	12.0		17.6	14.8	17.2	14.4	17.7	14.0
6: 5. 骨体断面指数	80.8	75.9	63.2		77.9	68.8	73.7	73.4	79.6	75.1
7 a. 中央周	72.0	71.0	61.0				62.6	54.1	62.3	54.1
大腿骨	No. 58 (r)	No. 68 (l)	No. 82 (r)	No. 84 (l)						
1. 最大長					444.0	384.0	423.7	393.9	412.1	381.8
2. 全長							418.4	389.3	408.4	377.7
6. 中央矢状径	33.0	32.3	26.0	27.5	27.1	24.2	29.6	24.9	27.6	24.5
7. 中央横径	28.1	28.9	27.2	28.0	26.6	23.7	25.4	23.4	26.3	23.0
6: 7. 柱状指数	117.4	111.8	95.6	98.2	102.3	101.2	116.7	106.9	105.4	107.3
9 a. 体上最大径	-	-	31.2	32.2	32.2	30.2	30.3	28.2	32.1	28.7
10 a. 体上最小径	-	-	21.1	23.0	24.6	22.5	24.5	20.8	24.9	21.9
10 a: 9 a. 偏平指数	-	-	67.6	71.4	77.5	74.8	80.0	74.1	77.7	77.7
8. 中央周	97.0		88.0	87.0	85.3	77.5	-	-	-	-

## 四肢骨

まず、上腕骨は3点確認できる。右2点（No. 67, 89）と左1点である（No. 59）。No. 67とNo. 59に関しては、骨質もしっかりしており三角筋の付着面も明瞭である。また、その計測値も古墳時代男性よりやや大きい。右No. 89の上腕骨は、骨体部が15センチ程度保存されているのみである。筋肉付着部は明瞭であるものの、他の2点より細く華奢である。計測値も古墳時代女性平均に近い。

前腕骨では、橈骨2点（No. 57, 66）と尺骨（No. 89）が確認できるにすぎない。橈骨は左右各1点で、大部分が破損している。尺骨は左のみで、保存は悪い。骨間縁が発達していることが確認できる。骨質が厚くしっかりした印象である。

大腿骨は、右5点（No. 7, 26, 58, 82, 84）左3点（No. 38, 68, 84）計8点保存されている。完形ではないが比較的よく残っている。長さは普通程度であると思われる。しかし、計測可能な4点（No. 58, 68, 82, 84）の太さは、近畿地方古墳時代男性の大腿骨よりはるかに大きい（表2）。後面の粗線がよく発達し、摘んだように突出している付柱（ピラストル）となっている状態である。このような粗線の発達は、縄文人骨にはしばしば見られるが、古墳時代人骨には、比較的めずらしい。No. 82（右）とNo. 84（左）およびNo. 58（右）とNo. 68（左）は、形態や計測値が近いことなどから、明らかにそれぞれが対と考えられる。

脛骨は、左右2点ずつ確認できる。それぞれ一部が破損しており完全なものはない。No. 13（右）とNo. 14（左）は、骨質も厚く頑丈であり、ヒラメ筋線付着部も明瞭であることなどから同一個体のものであろう。骨体断面はヘリチカのⅡ型である。また、No. 56（右）およびNo. 85（左）は表面が風化しており細かい特徴はわからないが、骨断面がやや扁平である。

そのほかに、左右対の踵骨（No. 24, 51）と大きい中足骨（中骨長が60ミリ前後）が保存されている。

## 3 まとめ

**個体数** 手賀4号墳に埋葬されていた人骨は、頭蓋と右大腿骨の数から少なくとも5個体となった。すべて成人であり、未成年は含まれていない。その5個体の内訳は、以下のごとく頭蓋と大腿骨でやや異なる。

## 頭 蓋

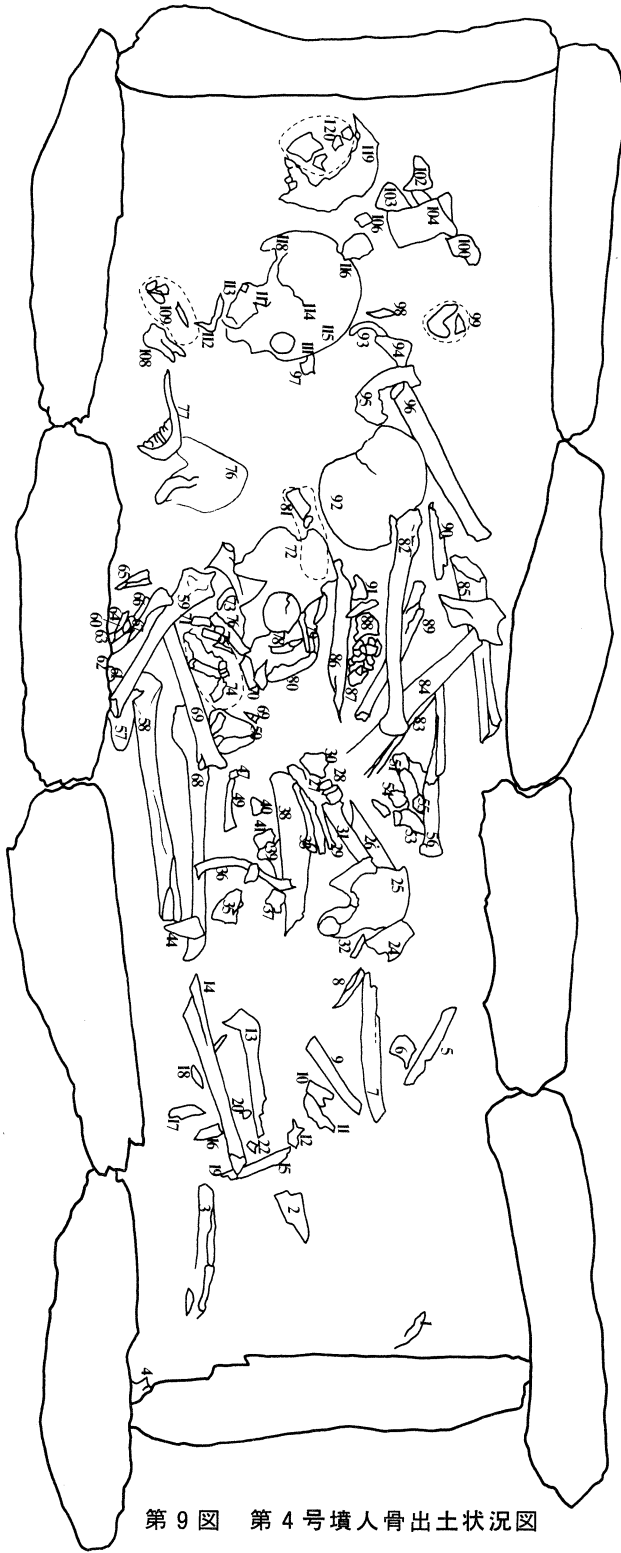
No.	年 齢	性 別
9 2	壮 年	女性らしい
9 4	壮 年	不明（やや男性的）
1 0 4	壮 年	不明（やや男性的）
1 1 1	壮 年	男 性
1 1 9	壮年後半から熟年	男 性

## 大腿骨

No.	年 齢	性 別
5 8 と 6 8	成人（壮年）	男 性
3 8 と 8 4	成人（壮年後半）	男 性
7	成人	女 性
2 6	成人	女 性
8 2 と 8 4	成人	不 明

しかしながら、大きな矛盾がないので、とりあえず5個体に属すると考えてよかろう。すなわち、手賀4号墳出土人骨5個体の内訳は、壮年男性1・壮年後半から熟年男性1・壮年女性2・性別不明の壮年1となる。

**時代的特徴** 一般的に古墳時代人骨では、大腿骨の骨体が前後に偏平であり、脛骨の断面が正三角形に近く、縄文時代と対称的なことは良く知られている。しかし、本遺跡の出土四肢骨のなかには、粗線が発達してピラスタルとなった大腿骨や断面が菱形の偏平な脛骨がある。すなわち、四肢骨に関してはやや縄文の特徴が見られる。しかしながら、本遺跡出土人骨の頭蓋は、眼窩上方の骨肥厚が弱く、眼窩上縁がゆるやかに弧を描き、鼻骨が狭い。その意味では、古墳時代人骨の特徴を十分に表しており、全体として見ると、古墳時代人骨として矛盾がない。ただし、頭蓋のすべての板間層が厚い特長は、病的なものか、地域的なものか不明である。今後、当該地域における古墳石棺出土人骨資料の充実を待って精査したい。



第9图 第4号墳人骨出土状况图

※ 表3参照

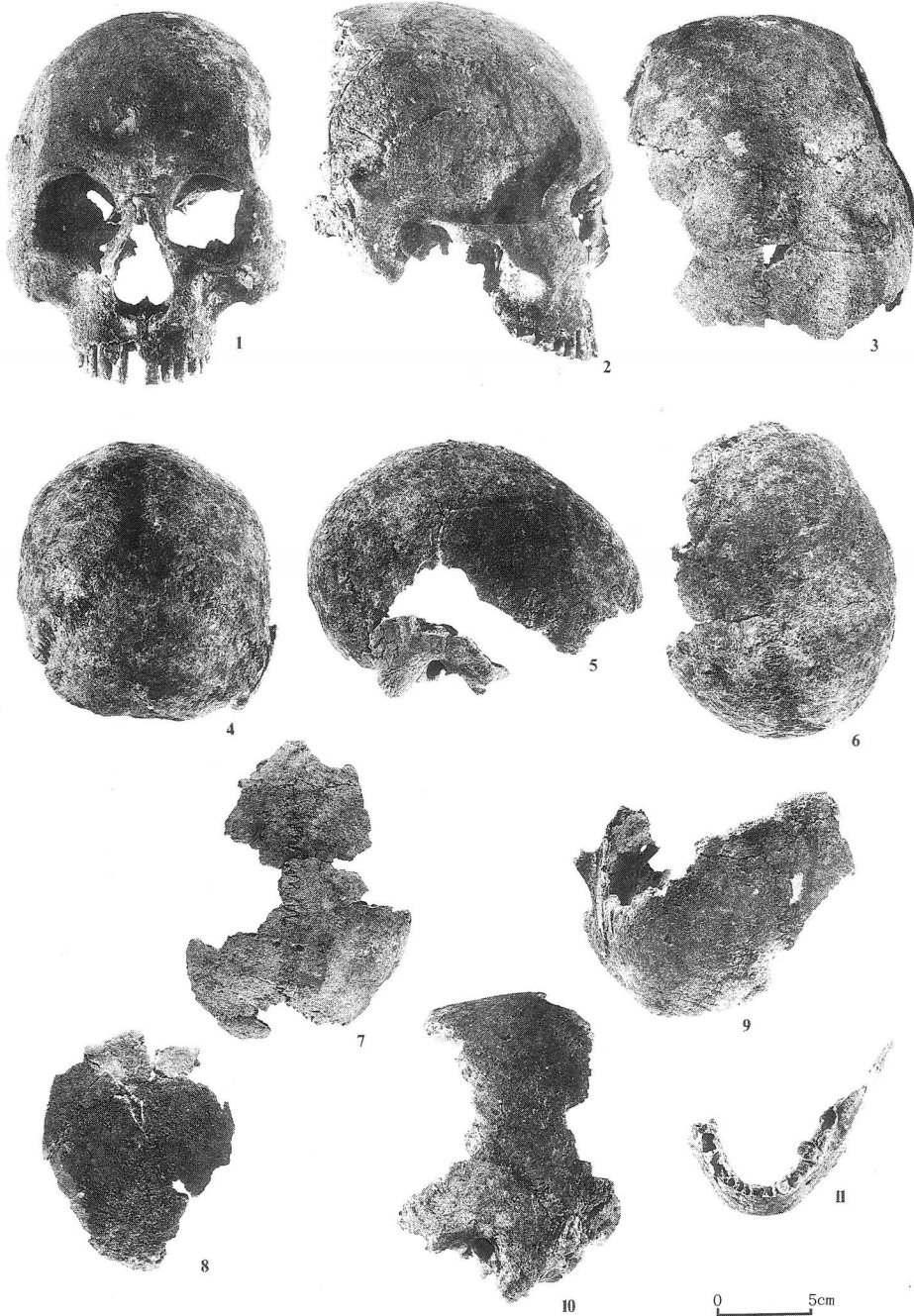
表 3 手賀 4 号墳出土人骨 一覽

人骨番号	同 定 部 位	人骨番号	同 定 部 位	人骨番号	同 定 部 位
1	右 側 頭 骨	4 1	腰 椎 骨	81	肋 骨
2	大 腿 骨 片	4 2	肋 骨	82	右 大 腿 骨
3	骨 片	4 3	肋 骨	83	腓 骨
4	頭 蓋 骨	4 4	四 肢 骨 (No. 68 と同)	84	右 大 腿 骨
5	左 大 腿 骨	4 5	肋 骨	85	左 脛 骨
6	四 肢 骨 片	4 6	骨 片	86	左 上 腕 骨
7	右 大 腿 骨	4 7	肋 骨 片, 椎 骨 片	87	胸 椎
8	左 脛 骨	4 8	肋 骨	88	腰 椎
9	四 肢 骨 片	4 9	左 肩 甲 骨	89	右 上 腕 骨, 左 尺 骨
10	腰 椎 骨	5 0	骨 片	90	肋 骨
11	脛 骨	5 1	右 踵 骨	91	下 顎 骨, 椎 骨
12	椎 骨 片	5 2	骨 片	92	頭 蓋 骨
13	右 脛 骨	5 3	寛 骨	93	頭 蓋 骨
14	左 脛 骨	5 4	骨 片	94	前 頭 骨
15	四 肢 骨 片	5 5	肋 骨	95	前 頭 骨
16	骨 片	5 6	右 脛 骨	96	人 骨 番 号 と 一 致 せ ず
17	四 肢 骨 片	5 7	右 橈 骨	97	右 錐 体
18	四 肢 骨 片	5 8	右 大 腿 骨	98	左 錐 体
19	骨 片	5 9	左 上 腕 骨	99	頭 蓋 骨
20	肋 骨 片	6 0	左 鎖 骨	100	頭 蓋 骨
21	骨 片	6 1	四 肢 骨 骨 頭	101	寛 骨
22	骨 片	6 2	右 腓 骨	102	頭 蓋 骨
23	椎 骨 片	6 3	肋 骨	103	頭 蓋 骨
24	左 踵 骨	6 4	肋 骨	104	頭 蓋 骨
25	左 寛 骨	6 5	右 肩 甲 骨	105	頭 蓋 骨
26	右 大 腿 骨	6 6	右 肩 甲 骨, 左 橈 骨	106	寛 骨
27	骨 片	6 7	右 上 腕 骨	107	頭 蓋 骨
28	左 距 骨, 仙 骨	6 8	左 大 腿 骨	108	頭 蓋 骨
29	左 腓 骨	6 9	上 顎 左 第 1 小 臼 歯	109	頭 蓋 骨
30	仙 骨	7 0	骨 片	110	頭 蓋 骨
31	大 腿 骨	7 1	左 上 腕 骨	111	頭 蓋 骨
32	四 肢 骨 片	7 2	右 寛 骨	112	顔 面 頭 蓋 骨
33	左 肩 甲 骨	7 3	恥 骨 部	113	頭 蓋 骨
34	腰 椎 骨	7 4	右 橈 骨, 胸 椎, 上 顎 骨	114	頭 蓋 骨
35	仙 骨	7 5	右 中 足 骨	115	頭 蓋 骨
36	右 鎖 骨	7 6	左 寛 骨	116	頭 蓋 骨
37	骨 片	7 7	下 顎 骨	117	頭 蓋 骨
38	左 大 腿 骨	7 8	肋 骨	118	頭 蓋 骨
39	肋 骨	7 9	右 肩 甲 骨, 椎 骨	119	頭 蓋 骨
40	肩 甲 骨	8 0	右 腸 骨	120	頭 蓋 骨

## 参考文献

- 城 一郎 1938. 「古墳時代日本人骨の人類学的研究」 人類学輯報, 1. pp. 1-333
- 新井正治・片野素道・小松邦太郎・宮崎尚武 1964. 「関東日本人脛骨の捻転角, 後斜角, 傾斜角及び彎曲指数について」『東京慈恵医大解剖学教室業績集』 25. pp. 1-7
- 大場信次 1950. 「関東地方人大腿骨の人類学的研究」『東京慈恵医大解剖学教室業績集』 3. pp. 1-66
- 蛭名忠次郎 1951. 「日本人前腕骨の人類学的研究」『東京慈恵医大解剖学業績集』 5. pp. 1-28
- 西原四良 1953. 「関東地方人上腕骨の人類学的研究」『東京慈恵医大解剖学業績集』 9. pp. 1-63
- 藤田恒太郎 1973. 「歯の解剖学」 金原出版
- 馬場悠男 1988. 「四肢骨」『三貫地貝塚』 pp. 443-480





- 1. No. 111 頭蓋正面
- 3. No. 111 頭蓋上面
- 5. No. 92 頭蓋側面
- 7. No. 104, 105 頭蓋
- 9. No. 119 頭蓋上面
- 11. No. 77 頭蓋下顎骨

- 2. No. 111 頭蓋側面
- 4. No. 92 頭蓋後面
- 6. No. 92 頭蓋上面
- 8. No. 94, 95 頭蓋
- 10. No. 119 頭蓋側面



1 ~ 3 寬 骨  
 6 ~ 13 大 腿 骨  
 18 ~ 20 上 腕 骨  
 23 桡 骨

4 ~ 5 踵 骨  
 14 ~ 17 脛 骨  
 21. 22 鎖 骨  
 24 尺 骨

## IV ま と め

手賀古墳群の調査は、耕作中に新たに発見された古墳を現状のままでは破壊されそうのため、学術調査を行い遺跡の記録保存と出土遺物の保管保存の方法を採ったものである。同地区でもそうであるが開墾中による箱式石棺の発見例は多いが、ほとんどが報告のないまま畑中より掘り出され廃棄されている。近世・近代の時期には、身近に石がないことから家庭の井戸・軒下などで重宝に利用されてきた（註6）。今回は、所有者ならびに地元区長の埋蔵文化財への関心と保護保存の認識の深さにより、貴重な調査ができることになったのである。住民の文化財保護の精神が徐々にではあるが高揚していると言えよう。

当古墳群第3号墳・第4号墳ともに古墳の形態は、完全に掘りなかつた。墳丘は現状では削平されておりないものと考えられ、埋葬施設はともに盛土中でなく地下に設けられた。そして千代田町姥久保2号墳のように盛土がほとんどなく際立った古墳特有の墳丘外観を呈しない無墳丘墓（註7）とする例もあることから、当古墳についても昭和30年代の空中写真にも墳丘は見当たらず一概に開墾による削平とも言及しがたい。隣り合わせる第2号墳は、方形の高さ2m足らずの墳丘を持つが、地域的な特徴、また霞ヶ浦周辺に多く黒沢彰哉氏の提唱する伝統的「特異埋葬施設古墳」（註8）での主体部の位置と筑波型箱式石棺の時代観（註9）の整理を踏まえた上で、新たな調査分析が必要となろう。昭和59年に道路工事中に発見され惜しくも埋葬施設の位置を確認できないまま箱式石棺の石材を撤去されてしまった井上古墳群第4号墳の場合も、前方後円墳との見方が有力であり、推定される主体部の位置からも（註10）特異埋葬施設古墳の範疇で捉えられよう。

周溝は、第3号墳・第4号墳ともに溝状の掘り込みは確認できたが、トレンチによる一部の確認であったこととトレンチャーによる攪乱がひどく古墳全体像を把握する調査に至らなかったことは残念であった。また、古墳における埋葬位置の確認や墳形規模を調査できなかったことも時間的・経済的理由があるにせよ史料価値を下げてしまった。

遺物は人骨と金銅製耳環だけであり、追葬は認められるが盗掘を受けていない状態での副葬品のあり方を研究するうえで重要な調査事例となろう。終末期古墳の箱式石棺からは、殆どの場合多くの副葬品を伴わない。

当古墳群第4号墳の場合、出土した金銅製耳環は2固体一対と考えられる。埋葬された確認された人骨は成人男女5体分であり、どの人骨に伴うものであるか確定できない。金銅製耳環は玉類とともに出土するものが多く、茨城県内では、県南、県西方面での出土例が多い。真壁郡真壁町山王塚、八郷町兜塚古墳、幡山古墳等（註11）がある。盗掘を受けない古墳の調査に伴う金銅

製耳環の単独での出土事例の集成をしてはいないが事例は極端に少ないと思われる。また、この金銅製耳環の入手条件については、被葬者が直接に製造を依頼した品か直接代償を支払って入手したものなのか、あるいは祖先より伝えられた伝世品であるのか等は、当時の文化や家族社会・身分秩序を理解するのに興味深い。

人骨については、東京国立博物館人類学教室の馬場悠男氏並びに梶ヶ山真理氏に鑑定依頼をお願いし被葬者の実態を掴むことができた。今まで当町における人骨出土の事例は、昭和30年調査における三昧塚古墳の1体と昭和59年の主体部撤去後の調査における井上古墳群第4号墳の1体があり、6世紀初頭と中葉頃の古墳時代に生きた首長層とされた。被葬者は、共に一体のみで追葬のない古墳であり、第2埋葬施設も発見されていない。

今回の調査による第4号墳の箱式石棺には、保存状態は良くなかったものの成人5名の遺骸に分類できた。しかも男女2体ずつと性別不明1体とに分けられ被葬者の関係図を考察する上で大きな成果となった。今後遺伝子科学的な方法により分析すれば被葬者の血縁関係も判明し、当時の葬送儀礼や追葬等についてより詳細にデータが集積されよう。

手賀古墳群については、現存する古墳も少なく調査された資料もなかったため、形成過程について述べることはできない。中でも第4号墳については、主体部の調査を行い遺物も検出できたが、時代を特定する資料が無く時期比定は困難である。しかし埴輪を持たず周溝並びに周溝内古墳規模と形態からみると7世紀後半の古墳と考えられる。

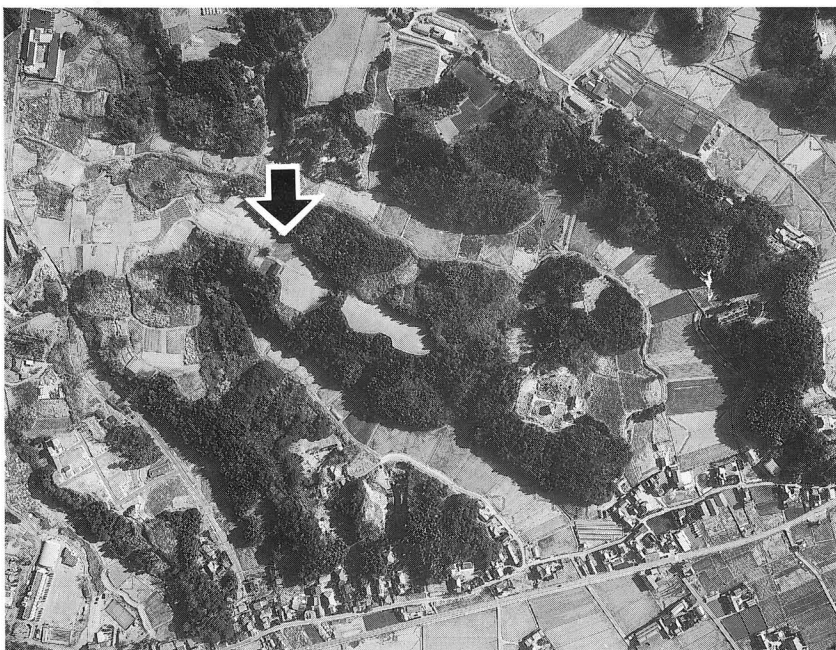
#### (参考文献)

- 註1 『井上古墳群第4号墳発掘調査報告書』玉造町教育委員会 1984
- 註2 『手賀地区ゴルフ場開発に伴う文化財アセスメント報告』玉造町遺跡調査会 1992
- 註3 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県 1991
- 註4 『茨城県行方郡玉造町原遺跡発掘調査報告書』玉造町教育委員会 1982
- 註5 『荒原神社馬場前遺跡発掘調査報告書』玉造町教育委員会 1993
- 註6 「手賀郷土誌」手賀尋常小学校編
- 註7 「姥久保2号墳の調査」『婆良岐考古第14号』黒沢彰哉、婆良岐考古同人会
- 註8 「常総地域における群集墳の一考察」『婆良岐考古第15号』黒沢彰哉、婆良岐考古同人会
- 註9 註8に同じ
- 註10 『井上古墳群第4号墳発掘調査報告書』玉造町教育委員会 1984
- 註11 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974



空中写真（1）

昭和39年2月撮影



空中写真（2）

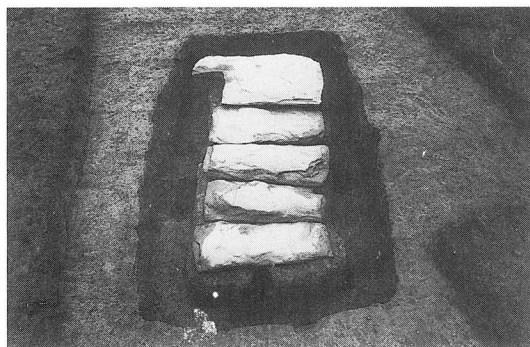
平成6年1月撮影



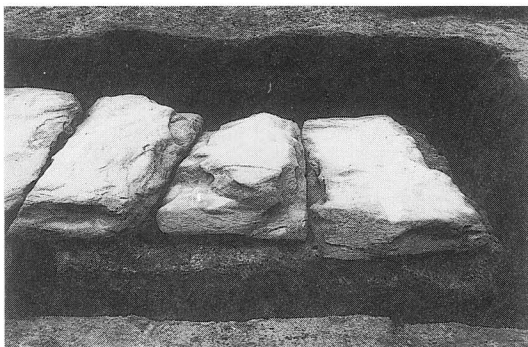
第4号墳主体部プラン確認



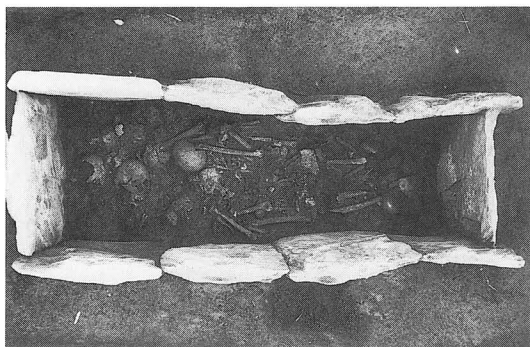
第4号墳蓋石



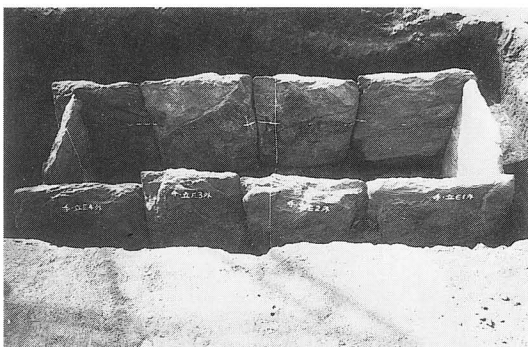
第4号墳蓋石完掘



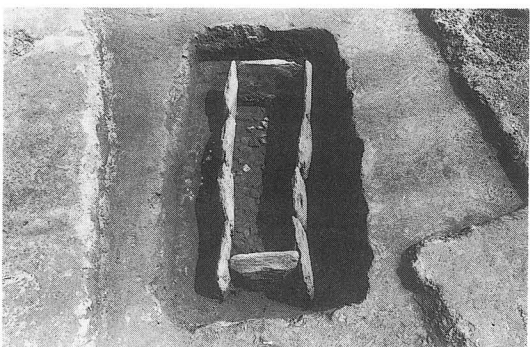
第4号墳蓋石配置状況



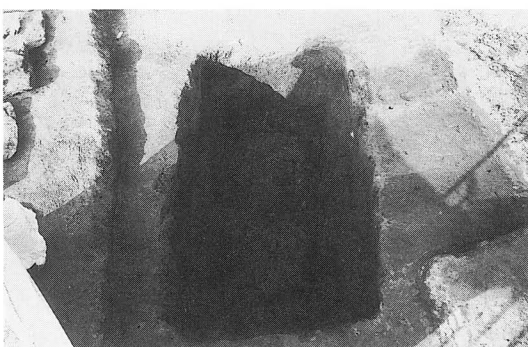
第4号墳石棺内全景



第4号墳側壁配置状況

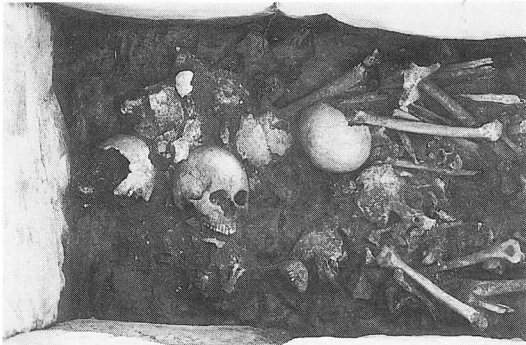


第4号墳主体部完掘



第4号墳掘り方完掘





第4号墳北壁部人骨出土状況



第4号墳南壁部人骨出土状況



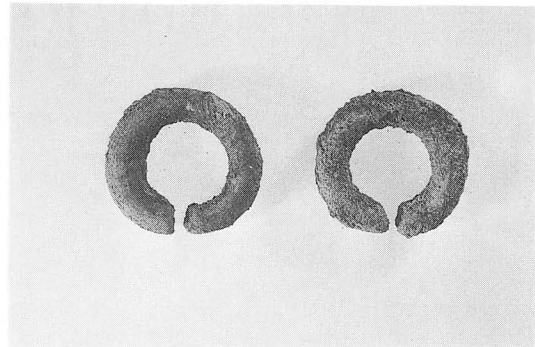
第4号墳出土頭蓋骨遠景



第4号墳金銅製耳環出土状況



第4号墳出土頭蓋骨近景



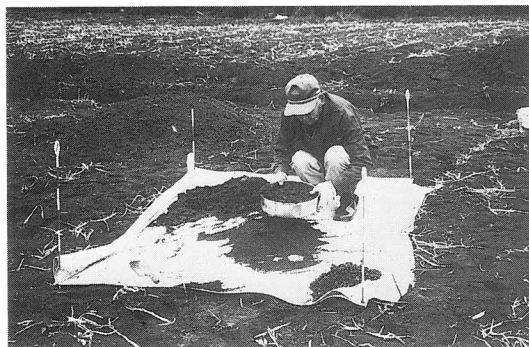
第4号墳出土金銅製耳環



第4号墳作業風景



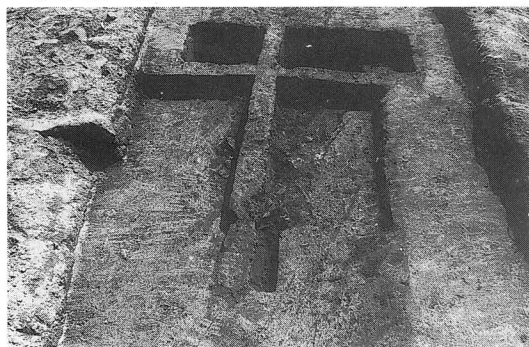
第4号墳石棺撤去風景



石棺覆土精査



第3号墳調査風景



第3号墳土層断面



第3号墳主体部掘り方完掘



第1号墳遠景



第2号墳遠景



第4号墳調査風景



調査参加者



---

手賀古墳群 第3号墳・第4号墳発掘調査報告書

平成元年4月31日 概要編集発行

平成5年3月31日 概要印刷

平成6年7月31日 印刷発行

編集 玉造町史編さん委員会

発行 玉造町教育委員会

印刷 (株)さんゆう社印刷

---